

# 日本書紀

廿五

太政官文庫			
	八	和	
	四	書	
二	九	門	
〇	〇	類	
冊	函	號	類

內閣文庫			
	八	和	
	四	書	
一	九	類	
三	〇	冊	
七	〇	架	
函	冊	架	

內閣文庫	
番號	和 8498
冊數	20 ( 16 )
函號	137 45



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





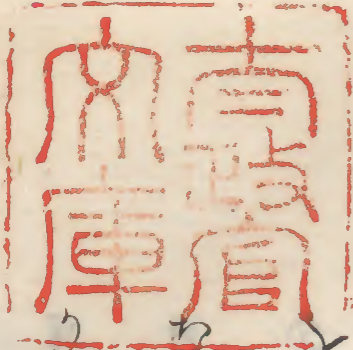
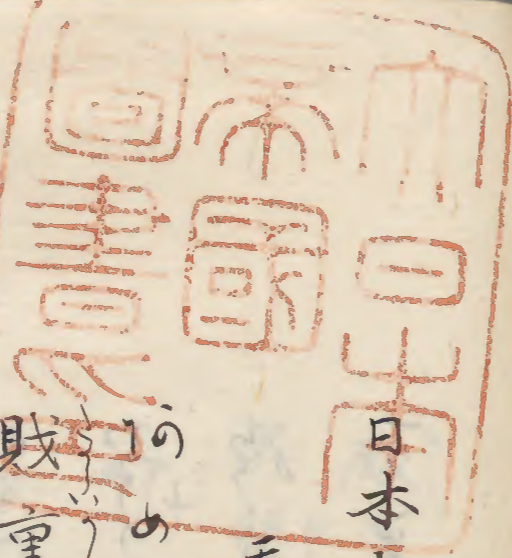
南  
宮

日本書紀卷第...  
天萬...  
...  
...

廣  
辻  
氏  
藏  
書  
記

未





日本書紀卷第二十五

天萬豐日天皇



孝德天皇

天皇 天豐

のめより此と...  
 天皇子日足姫天皇の

新たり佛法と...  
 新たり佛法と... 神の道

とのちり...  
 とのちり... 生国竟社の樹と...

ちりや...  
 ちりや... 柔

ささのの...  
 ささのの... 真

さひと...  
 さひと... 恩



みよとのつとくし 天豊賊重日

是姫天皇四年の六月のくいぬの

日天のめ賊と重は日ひ是は始ひ

の天皇位とちりおほひのみとよは

しつちんとおほひてみよのり

のしつちんとおほひのめは

か中ら臣と鎌の子のち連は

しつちんとおほひのめは

てしつちんとおほひのめは

古人大兄

殿下のいりゆかり 授皇子え 殿下

の舅ちなり兄す今古人大兄の

みよのしつちんとおほひのめは

しつちんとおほひのめは

ち人の弟ちのしつちんとおほひのめは

ちよるうり日舅ちのみよのしつちんとおほひのめは

てしつちんとおほひの望は香は

しつちんとおほひのめは

兄のみよのしつちんとおほひのめは







ほろりよのちもしてみれ刀とぬ  
うしめをれちりうたう法真寺の  
いさしのおほしものと塔との間よ  
て髪とそつて袈裟と  
いさし川にれよつて経皇子い  
なうももいさす人ぬみく  
らよのけつてあつ川ひけきまうし  
知る時よおほしものなるよこの  
し鳥羽字ころみのゆきをいひてさみ  
金 勅 帯 檀

くの石よつり大上いあふ健部君ころみの  
ゆきをいひてさみくのひつり  
いさし百友百友いさし連連国つた  
こ伴のみわりのいさしとりのとけ  
いさし百友百友いさし部部号と豊豊賊  
天皇よつてつてつてつてつての尊  
とすそ中大兄をよつてひけきの  
みよなうつてつてつて阿倍内麻呂  
居よつてひつりのつてつてつて  
大 臣



獲我倉山田石川麻呂臣とみきの可  
右 ちきみとわ 大錦おほなきのつらとて中  
大 臣録るつじしよ内しきひてつらのか  
 ちきみとなし 射そとそし 戸を内し  
 小可越ゆまに 中臣のうすこのむし  
国 いふまじし 志 小可越ゆまに  
友 つらき 小可越ゆまに 小可越ゆまに  
友 司 小可越ゆまに 小可越ゆまに  
 退廢そあやめらしく 小可越ゆまに  
置 中 小可越ゆまに  
後 小可越ゆまに 小可越ゆまに

小可越ゆまに 小可越ゆまに  
 史えきくろ 小可越ゆまに 小可越ゆまに  
主 治のののののの日こりひのめあさよ  
理 阿倍倉材麻呂大臣と 獲我山田石川  
全 麻呂大臣と 小可越ゆまに  
式 木 小可越ゆまに  
練 金 小可越ゆまに  
 のこのうの 天皇 小可越ゆまに  
 皇太子 大槻樹おほつきぎのり下と 小可越ゆまに  
 小可越ゆまに 小可越ゆまに  
 天神地祇あまつかみ 小可越ゆまに



天の御座る地その帝道と一

うもむまのようくひて君臣つ

あつてもうしかひぬ皇天ら

我のつてあひとところして

と今もこのまゝに

あつても今よりゆくさき君の二の

はちとむらじハみ

とむらじハみ

よこしとひり地妖一鬼ころ

人うてつらきこと日月の

くまのん

天豊財重日足姫天皇四年とあ

めて大化元年とあ

大化元年秋七月ひのこのうの

のえと山の日息長足日廣額天皇の

みむまの同人皇女を

とむらじハみ

の妃く阿倍の

倉村麻呂



その小足媛<sup>こあしひめ</sup>とさうしに有間皇子と生  
 らるり次妃と種我山田石川麻呂大  
 臣のむぎの乳娘<sup>ちちのむすめ</sup>とさうしにのくぬ  
 日高藤<sup>ひたかふ</sup>とさうしにひよとさうし  
 とさうしてさうきしてさうさ百瀬  
 のらまののはらけ任那のたし  
 ありのあみさののらきしてさう  
 さうさうの大使佐平縁福や  
 さう下津館<sup>しんかん</sup>とさうして京より

そのせめとこのと人二平のたしよ  
巨勢 徳大 臣  
 とさうしてさうあ明<sup>あき</sup>み<sup>み</sup>とあり  
 日本<sup>やまのくに</sup>天皇<sup>てんおう</sup>おけん<sup>おん</sup>との  
 ことさけく天皇のさうさうさ  
 つと高藤の神子のさうさうさ  
 さうさうさうさうさうさうさ  
 長<sup>なが</sup>のさうさうさうさうさ  
 さうさうさうさうさうさうさ  
 さうさうさうさうさうさうさ  
 百瀬のたしよとさうさ



してのさまたくありみくもあまの  
ちりちりーの日本<sup>明神</sup>天皇のおけん  
このまーはるーの我とつうお  
の世百濟国をりてうちつうやけ<sup>内方家</sup>  
とーはるーは三後の綱の  
なううん任那国をりて百濟よ  
こまふ後よ三<sup>ニ</sup>禰<sup>ノ</sup>栗<sup>ノ</sup>隈<sup>ノ</sup>君<sup>ノ</sup>東<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>とさ  
うしてみまのさしをんや  
あまふのよの百<sup>ニ</sup>濟<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>みことう

まーあまのさしをみせ  
はるーはるーのさしをん  
うらてのさしをん  
みまのさしをん天皇あま  
らるーみまのさしをん今う  
さまのさしをん国とあまのさしをん  
ままのさしをん一<sup>ニ</sup>汝<sup>ノ</sup>佐<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>對<sup>ノ</sup>  
うらるーのさしをんあまの  
うらるーのさしをん今う



て三幅の東人馬飼造 あづまのまけぞう 谷と とまじし  
 ぬき み も あ り し ぬ 鬼 部 達 率 意  
 斯く妻よと あ ら は し ま し て  
 とつちの く し の 日 天 皇 何 倍 の く  
 一 も の 大 臣 獲 我 石 川 も の  
 一 も の み と の し の は  
 一 の ひ の 玉 の あ  
 一 の 天 下 を あ ら は し ま し  
 一 の 治 と 治 と

成ら の と の 日 天 皇 何 倍 倉 材  
 麻呂 大 臣 獲 我 石 川 万 侶 大 臣 よ み と  
 の し の ま け く 大 ま と の り 百 伴  
 の し の ま け く 大 ま と の り 百 伴  
 ち を り て ま け く 大 ま と の り 百 伴  
 獲 我 の り の 日 天 皇 何 倍 倉 材  
 一 の 先 と の あ ら は し ま し  
 一 の あ ら は し ま し



のちより政事をとらうとす。この日倭  
のあまのあまひひらふまおらうの国  
忌部首子麻呂とみのくまのまらし  
て神よしてまらる幣をとけはり  
八月ひのこらみの朔めの初の日東国  
よみこらるる保をよみこらる  
ちこらよみとのつらてのこまは  
く大神のお奉寄すまらるる  
まらよ今ほらてくまらるるあま

んとそとそとあまのあまのあま何  
るみあ人こらるる大いあひらう人  
とまらこらまけはこらまら  
てみれ産籍はく田畝とく人つ田  
まらこらうんて其園池水陸のく  
あまよおほ人姓と俱なりまらみ  
こららるる東国よとらうてはらら  
るるこららるる他のまららるる  
こららるるあまらるるまららるる  
民・貧苦



と、しむるもれり京りする  
のほろん時よ多しおほん百姓の  
じよしりあつとあふんぬし法  
とんと国造部領ものまゝなりぬし  
公事もとてつりまふ人時よ、部内の  
馬よのり部内ぬ飯ひとくく分りりり  
え法りる法とけつりいぬぬえり  
めらよのまきし法よりりりり  
く位ぬまきりし判官とひと許

り下法る地のみひなむと  
二倍りして徴人ぬぬりりとお  
りきまめて法りをおせしんぬ長  
官の徒りぬ人ひ者九人次友り  
の徒者ハ七人主典の徒者ハ五人  
らむてりきりのほらぬはあ  
るしとぬぬ人りぬしは  
をぬぬしり名りぬぬ  
人りりりりりり国造伴造縣の



稲<sup>いんぎ</sup>並<sup>な</sup>よあしきしてしやきいほ  
 たりうのしして我祖の時しは官<sup>くわん</sup>  
 家<sup>け</sup>とありううの郡<sup>ぐん</sup>縣<sup>げん</sup>をおさむと  
 まうせんといましちみとしち  
 河<sup>か</sup>ちうのまよくゆめき朝<sup>あさ</sup>よす  
 其となはんほしひよよとの  
 ちをえてのちよすうきし又  
 けなるあ兵<sup>へい</sup>庫<sup>こ</sup>をほくして国<sup>くに</sup>郡<sup>ぐん</sup>  
 の力<sup>ちから</sup>甲<sup>か</sup>弓<sup>ゆみ</sup>矢<sup>や</sup>をおさめ河<sup>か</sup>のめ也<sup>なり</sup>国<sup>くに</sup>

ちうくまじきと境<sup>さかい</sup>をまうせん  
 としてくよのついでにえきと  
 河<sup>か</sup>のめなまを本<sup>もと</sup>ありあつま  
 こまふし其<sup>その</sup>まきの国の六<sup>む</sup>の縣<sup>げん</sup>  
 ほしをまうしちうく戸<sup>と</sup>籍<sup>せき</sup>をほ  
 くる并<sup>な</sup>田<sup>でん</sup>畝<sup>あし</sup>をうふし  
 壑<sup>くわ</sup>田<sup>でん</sup>頂<sup>てい</sup>畝<sup>あし</sup>をし民<sup>たみ</sup>戸<sup>と</sup>口<sup>こう</sup>年<sup>ねん</sup>紀<sup>き</sup>を  
 あれくまうし  
 ましちうみしと



おて退(しん)しとの終(はつ)を以(もつ)て 帛布(びやくふ)を  
とて 差(さ)りて 日鐘(にっしょう)と  
遷(うつ)りて 尊長(そんぢやう)を  
こすつて 尊長(そんぢやう)を  
そめひとこのみまんとて  
その伴造(ばんぞう)尊長(そんぢやう)は  
いふに 尊長(そんぢやう)の  
おとめて 遷(うつ)りて

よおとめよその終(はつ)を以(もつ)て 帛布(びやくふ)  
を 差(さ)りて 日鐘(にっしょう)と  
遷(うつ)りて 尊長(そんぢやう)を  
こすつて 尊長(そんぢやう)を  
そめひとこのみまんとて  
その伴造(ばんぞう)尊長(そんぢやう)は  
いふに 尊長(そんぢやう)の  
おとめて 遷(うつ)りて



~~~~~とくくよ朕うらまきとん  
おのこのあこの法いおほん  
のこおほん良人のこのもよ  
子ハその父よ法をよおほん  
おのこ婢を娶てうらん子ハそ  
の母よまげよおほん  
奴入嫁てうらん子ハその父よ配  
~~~~~ 両家の奴婢のうらん子ハ  
その母よ法をよ~~~~~ 寺家の法入

~~~~~の子ハ良人の法のこ~~~~~  
別よ奴婢入ハ奴婢の法のこ~~~~~今  
うく人よあ~~~~~て制の~~~~~あこ  
を~~~~~のこのうの日み~~~~~と大寺よ  
~~~~~て僧尼とあ~~~~~法と~~~~~みこ  
~~~~~の~~~~~の~~~~~磯城清宮  
あめの~~~~~の~~~~~天皇の十  
年中~~~~~の明王佛法を~~~~~大倭  
よ~~~~~て~~~~~の~~~~~



みよちとよしほくましとねふを  
つる以 藤我稻目宿禰ひとりうの  
法をうけつり 天皇をるもちりい  
めのまきよよみとのりしてりの法を  
あうめこしむ 澤<sup>が</sup> 語<sup>の</sup> 田<sup>の</sup> 宮<sup>の</sup> あめの  
こちろしめり 天皇のみよし藤<sup>そ</sup> 我<sup>が</sup>  
のじまのまきよの考<sup>の</sup> 父<sup>の</sup> 風<sup>よ</sup> おい  
くしてるま 能<sup>に</sup> 世<sup>の</sup> みのををあ  
むちろしとあし 餘<sup>の</sup> ちろしよい  
よ

このうもらけきしてけりほ  
んとて天皇むまのまき福よ  
とのまししてりの法をあつんこし  
小<sup>と</sup> 壘<sup>の</sup> 田<sup>の</sup> 宮<sup>の</sup> はめのしちろしめをみ  
よしむまのまきよの天皇のおほ  
しあよ火六のぬいよの<sup>備</sup> みの<sup>像</sup> 火六  
の<sup>カ</sup> 像<sup>の</sup> をほくまきほくまの  
みの<sup>教</sup> をあし けりほくまの  
とけしよいよまき 朕<sup>も</sup> 正<sup>教</sup>



とあつめて大猷とてしひ  
とみり小故沙門拍の六ほりし福亮  
惠雲為安靈雲惠至寺僧旻道登  
惠隣をりてとつりあのあ師  
一法ともよ惠妙ほりしありて百濂  
寺の寺主とれしはけとつりのほり  
のしホホりしはけとつりのほり  
らしはけとつりしはけとつりのほり  
のみつりしはけとつりしはけとつりのほり  
教

法のとつりしはけとつりしはけとつりのほり  
しはけとつりしはけとつりしはけとつりのほり  
寺えはけとつりしはけとつりしはけとつりのほり  
寺司と寺主と法津  
諸寺とあつりしはけとつりしはけとつりのほり  
行僧尼奴婢田  
向のむつりしはけとつりしはけとつりのほり  
実  
うせとのむつりしはけとつりしはけとつりのほり  
目名とつりしはけとつりしはけとつりのほり  
三掃色夫君額田部のみ  
らつりしはけとつりしはけとつりしはけとつりのほり



九月ひのしもの朔使者とく  
よきしして兵をいさめむ

あ、本よいきく六月より九月

いさめて使者をよむよきし

てくさくの兵をあらむ

はらのしつみの日古人皇子 稷我

の田口とんういけうのののちの

推子 吉伎 笠重 川 堀 やまのあやのあ

いさる 朴市 茶 のえや 道 佐田 来津

みしとくふ 理人 としうら

式本よいきく 古人 大子 式本

く 古人 大見 はみよの山

入まひゆり 或ハ 吉野 たるとま

ひのしもの日 吉伎のついのとん

重中大見のみよあ いさ

しきく む のあ ひと の皇子

と稷我のくくらのとん 川堀 木と

みしとく む としう は の後



よく〜

あゝ木りい〜吉俊のつぎのを  
人童いぢの信のちのちうきふと頼我よりの

ちきみとよ〜い  
一ののみこのみよか〜んと

故ゆいりあ〜  
中大兄を以もて〜菟田うづた朴室はくしつ吉高よし

廉宮れんみや知ち〜  
兵へい宮みや知ち〜ひとと〜

とめ〜人太市ひとたにちのみこ〜

あゝ木りい〜十一月いちじゅういちがつきのみ〜

三十日さんじゅうにち中大兄ちゅうだにいのみこ阿倍あへ渠のち曾そ信のぶ

臣みま佐伯さへ部べ子こ麻呂まろ二人ふたり〜兵へい

三十人さんじゅうにんとめて吉人よしひと大兄だいにいみせめて

つゝ人ひとおほくと子こ〜

〜の妃み妾めかけと〜死し

或木あるきりい〜十一月いちじゅういちがつ野のの



けんのみやうとてふ人とい  
うる事ありて休<sup>い</sup>珠<sup>しゆ</sup>  
かのさるの使者ふく<sup>く</sup>し  
しておぼん<sup>ん</sup>く<sup>く</sup>おぼん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>録<sup>ろく</sup>  
し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>天<sup>てん</sup>  
皇の時<sup>じ</sup>も<sup>も</sup>代<sup>だい</sup>のおびん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>置<sup>おき</sup>  
標<sup>ひょう</sup>て<sup>て</sup>名<sup>な</sup>と<sup>と</sup>後<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>具<sup>ぐ</sup>臣<sup>しん</sup>連<sup>れん</sup>等<sup>ら</sup>  
と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>おの<sup>の</sup>

おのおぼん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>置<sup>おき</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>は  
し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>国<sup>こく</sup>縣<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>山海<sup>さんかい</sup>  
を<sup>を</sup>野<sup>の</sup>け<sup>け</sup>田<sup>でん</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>し<sup>し</sup>  
おの<sup>の</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む  
の<sup>の</sup>田<sup>でん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む  
と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む  
物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む  
連<sup>れん</sup>伴<sup>ばん</sup>造<sup>そう</sup>ホ<sup>ホ</sup>先<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>



あつてのちよきちよてま  
宮殿とほくし園陵とほくし  
おのちよのおほくし  
事のもよほくし易し  
上と損しを益しし制度とりて  
賊とやう民とそこ  
よ今おほくし  
といきほしあまの氷  
きたりてつるの地

おほくし  
よあまの  
とらまの  
劣弱と  
くろく

冬十二月きのよひつりの  
よのうの日天皇都よ  
豊濟よ  
いつく春より夜よ



みのなまのまよは向し一都うつろのま  
しなうらほちのくむさの日銭のくま  
ままうら海のほらうま枯查ひし  
よまうらうらうらまぬ沙の上よま  
あり耕田うらうらのまももも  
ほらうらうらうら

二年春正月きのねの朔みことおうこ  
しおらうらまぬら新あまめ  
んとのうまうらみとのまうらての

ままはく其一よ云り一の天皇  
ホのうまうら子代のおげんくも  
のまげまらひしよまをまらし  
伴造くまのまはちまらまらまら  
まらうら部木のまげんくも  
田庄とやまらうらて食封とまら  
まらうらまらまらまらまら  
あり布帛とらりて官人おげんく  
まらまらまらまらまら又云大夫治



民と治るるなるを治す  
此の故をのりすのりおりて  
民ののりたるをのりたる  
二ののりたるをのりたる  
甲申の歳内の国司部司京師園塞の行候  
防人驛馬傳馬のとよむるの鈴志  
契の定山河とよむるをのりたる  
よのりたるをのりたる長人のとよむるのりたる

よのりたる一人とよむる戸口と久々  
おのりたるをのりたるをのりたる  
のりたるをのりたる防のりたるをのりたる  
のりたるをのりたる時のりたるをのりたる  
のりたるをのりたるのりたるをのりたる  
防の長よのりたるをのりたる防のおほりたる  
のりたるをのりたるをのりたるをのりたる  
のりたるをのりたるをのりたるをのりたる







ささみの救よふくおふくく  
社 園の鈴契ふくくく  
長官とん 世を次官とんその上よ  
戸籍計帳班田めとめ  
くの法と法くくく  
里とく 里とも長一人とく  
おとくんくおとくくく  
おとくくくくくく  
めくくくくくく

らーめよおとく 田長三十歩ひろ  
二十歩と戻とせよ十戻と町とせよ  
粗稲 二束 二把町  
く 二十二束りー山谷さく  
くくくくくく  
くくくくくく  
旧のくくくく 田のくくく  
くくくくくく  
くくくくくく  
くくくくくく







丑斗おしき末女とてけうのち  
けう上つきのけうのけうとて  
子女の形容きりしきりめさ  
まうれ後一人 一人をとりてうめ  
一人の糧よあてよちけうのめ  
米これけけけけけけけけけけ  
月天皇お子代離宮よ使者とて  
郡国よかものけうてわ  
とけけけけけけけけけけ  
親附

あまの木のけうけう難波の狭屋部の  
色の子代のけうけうとてけけけ  
行宮よけけけけけけ

二月きのけうけうのけうけうの  
日天皇いけけけけけけけけ  
幸て獲我のみきのけうけうけ  
のけうてのけうけうけうけ  
あまのけうけうけうけうけ  
天皇う業けけけけけけけけ



むしーくよのうらひこゝろのちかほに  
連 諸百姓よみとのうらたすき  
朕みさくろくさのひとよの民をおさむ  
いよをみ明しうけて百姓のえ  
しをこころちさよほてみ  
ゆきひよのちかほをきく蜀堯の  
とくさむとさむみりしひて  
ちくしとけふと是よりの朕を  
よみとのうらひこゝろのちかほに

の天をおさむと朝しほせんを  
ちくしとけふと是よりの朕を  
まろ治とちかほ通てしひの  
ちくしとけふと是よりの朕を  
ゆきひよのちかほをきく蜀堯の  
堂の議と定しうらたすき  
よみ堯衛室の問きし下民よ  
くさ舜善とほくさあき  
ゆきひよのちかほをきく蜀堯の



























うさしあ上をいひさしとちにおし  
ちの川さの官人みるあやまらあり  
の巨勢徳称臣のおも所もおけん  
らの中よ戸ともよりあふふ悔  
のをえきさうふとくあつた戸  
と田部の馬をととけくその分井連押扱  
連ちひは名と二人いの上のあやさる所  
といひさししてくともいよあつ  
利とりのあまのさるあはの馬と

まううさしあ上をいひさし直須しほめ上をいひさし  
とくともあつしてはひよとも濁  
おしりい川の官人みれあや口  
ちありの紀麻利きま春艳はる臣おせさ  
所い人と朝倉君あさくら井上君いの上二人のりともや  
つてよの馬をいひさししててい  
みさうき朝倉君をて刀やはく  
らめさしはくくのきみの弓布ゆふと  
さしはくはくよとてすつれ



そつしよの物とりてあきら  
よ主共よつとてみさよ国造よ  
任片まつる国よて他よこち  
とめをすれぬまよわよよて他  
よちをぬきさるぬ是いの祀  
の命三帰君大ひのよ人百依ホあ  
やしらなつそのつとりの官人うく  
のと人磯伯丹比深目百舌鳥長兄つ  
きの福草たの癖いの草そ

君伊波史麻呂この大眼まてこ  
の八人ホみれあやまらありの阿曇連  
名とおせつとてい徳史しの  
所あき時国造よ官物とおく  
ま湯ゆ郊の馬まの今い  
てのと人百依うおせつ所ハ草く代の物  
あよおこめをきまよのうやほよ  
馬まととりて他のむすよ人きまよ河  
川が磐管湯麻呂兄才二人まあ



















名入部 辰人ス見 ともひの屯倉を  
むしりのともよとらんやうやとの  
給ふ臣と給ふら給ふておと  
の給ふ給ふら給ふておと  
いへ給ふら給ふておと  
く国よ給ふら給ふておと  
天下と給ふら給ふておと  
給ふら給ふら給ふておと  
とも給ふら給ふておと  
所封 封 民と給ふて

給ふら給ふら給ふておと  
の給ふら給ふら給ふておと  
おと給ふら給ふら給ふておと  
いへ給ふら給ふら給ふておと  
屯倉 屯倉 給ふら給ふら給ふておと  
給ふら給ふら給ふておと  
く腹 腹 給ふら給ふら給ふておと  
いへ給ふら給ふら給ふておと  
も高 高 給ふら給ふら給ふておと































世人市司要洛津海渡子のしりき  
とやめて田地あつちをいよつておほき畿内  
よりけしうて四方のくまをさしふ  
て農化うらの月よあしうていさみやま  
田はくくしとさすあよ養物やしものと酒と  
とくししとくしとくしとくしとくし  
ふんはひさしと畿内よ昔た  
まよよ四方のくまのちやつし  
らうらしとくしとくしとくしとくし

らひてみとのりのせしめし  
しとくしとくしとくしとくし  
秋八月のくまの翔ふのしとくし  
の目みよのしとくしとくしとくし  
のあれよそれ天地あつちのあつち  
時とくしとくしとくしとくしとくし  
人よれいけあめつら萬物を生  
万物のうちよ人は是こゝろ穢靈けいりやうあり  
ひあり間よ聖人せいじん主まつらみよ聖せい天



















夏四月ひのみのみの朔のくむかの

日みまのりてのいもも  
惟神しん神かみ

し神の道のまはるる  
我子こ志こころ信まこと

人とまはるる天地と

りてまはるる君とまはるる国なり

もろくもらうる皇祖の時より天

下おちりてまはるる地と

ふとまはるるまはるる神

の名な天皇の名なこよりまはるるあり

まはるる人むの民とまはるる

ひまはるる造等つくりのとまはるる

是よりつて卒土つひの民のこ

かまはるる我をまはるる

おのゝ名をまはるる又まはるる臣

ひまはるるのまはるる

れまはるる姓なの神の名も王の

名もつての所よまはるる

ひまはるる前まへに知しる











役とやめ給

冬十月きぬのの朔きの日の天  
皇河の中めの湯温よりそまをひひら  
きよの大良しうらきみしらおほくと  
もよとくく十二月晦天皇温湯より  
くくましく武庫のうらやよとさ  
武庫の地  
のなかり  
は火はくし時の人こまみさうきあや  
めうこも七色一十三階の冠とさく

まも一云織冠ハ大小ニ一ハありなう  
りのそりしにけさけくあいのそて  
くらのひとけう一裁う服の色ハ  
らひよゆらむささめらゆ二よ云ぬ  
いののくろ大小ニ一ハありあは  
のそりしにけさけくあいのそて  
緑服の色ハなまひよみりぬのくろ  
よおゆ一三よ云紫冠大小ニ一ハあり  
紫とてけくささめらゆのそりしに















こらてまりの 啓<sup>ひら</sup>再の 柵とおさめても  
下をみしよきけし けあよ 絨と志  
あのと の 民と せいひて ちて 柵<sup>さ</sup>  
戸よとく

丑年春正月ひのしむすの朔みをとあ  
み

二月うつ十九階とけくろ一よ  
大織<sup>お</sup>二よ小織<sup>こ</sup>三よく大織<sup>お</sup>四  
いこ小織<sup>こ</sup>五よく大織<sup>お</sup>六よく

く小織<sup>こ</sup>七よく大織<sup>お</sup>八よく大  
花下九よく小花上十よく小花  
下十一よく大山上十二よく大山下  
十三よく小山上十四よく小山下  
十五よく大上十六よく大下  
十七よく小上十八よく小下  
十九よく立身<sup>たてみ</sup>の月もや高向  
の玄理<sup>けんり</sup>とけり 僧<sup>そう</sup>曼<sup>まん</sup>とよみとの  
て八者百官をみ



三月きのみのりの朔、のとのころの日  
阿倍大臣みくらを天皇しめりや  
人よつとせしむる奉衰而慟皇祖母尊  
皇太子等とふし諸らきみくらと  
いふまゝにさしむるは、  
く川の日獲我臣日向日向字ハ倉山田入  
臣とひつとよみ太子よし、こゝちひて  
さく母僕らとよし兄の兄麻呂皇太子  
のうらみ海あまひもせらるる

ひまらうてさしむる人ともさしむる  
しむる人ともさしむる  
大伴物連三國麻呂公穂積穂積咄臣と  
して獲我のくらやまきこしらの大臣の  
りよとせむくものりらさるる  
とせしむる大臣ししてさしむる  
せらるる人とも僕らよあまら天皇  
所よとせむる天皇し三國の



















くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
らむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし  
くはなむらぎのこゝろをいかにしるべし

皇<sup>きみ</sup>極<sup>たき</sup>とらう造媛<sup>むすめ</sup>はひのこをいかに  
しるべし  
皇太子<sup>みかど</sup>の  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし

はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし  
はひのこをいかにしるべし



皇太子... 御琴... 十婦... 交四月... 日小紫... 右大臣... 大伴長... 五月... 君色... 新羅王... 僧一人... 中容五人... 下役十人... 譯語一人... 雜

大伴長<sup>ウツミコ</sup>徳連<sup>ウツミコ</sup> 馬飼<sup>ウマケ</sup> 又大紫とさうりきて  
右大臣<sup>ウチナヒ</sup> とかむら  
五月<sup>イツキ</sup> 乙未<sup>イツミ</sup> の朔<sup>ツキ</sup> 小善<sup>コタカ</sup> 下<sup>シタ</sup> 三輪<sup>ミツル</sup>  
君色<sup>キミイロ</sup> 又<sup>マタ</sup> 大山<sup>オホヤマ</sup> 上<sup>ウヘ</sup> くりの<sup>クリノ</sup> 乙未<sup>イツミ</sup> 南磨<sup>ミナモリ</sup>  
ホミキ... 新羅王<sup>シンラクウ</sup>  
... 質<sup>シツ</sup> とかむら 送者<sup>オウシャ</sup> 三十人  
僧一人<sup>ソウイチニン</sup> 侍席<sup>シヤク</sup> 二人<sup>ニニン</sup> 忍<sup>ニギ</sup> 一人<sup>イチニン</sup> 達友<sup>タツトモ</sup> 席<sup>シヤク</sup> 一人  
中容<sup>ナカヨロ</sup> 五人<sup>ゴニン</sup> 下役<sup>ゲヤク</sup> 十人<sup>ジュニン</sup> 譯語<sup>エキゴ</sup> 一人<sup>イチニン</sup> 雜<sup>シラ</sup>



備人十六あもせり三十七人な

白雉元年春正月のりよのうしの朔

車駕あふぬのやよしてしりし

おりのもをみそなをしりし車駕

みやよろり給ふ

二月のりむすの朔はちのりし

穴戸国司くき之のむし醜

ろき雉とてしりし

国造首の内族贊正月九日麻山

えりしとてしりし

しりしとてしりし百濟君

明帝永平十一年白雉あつ

しりしとてしりし

はりしとてしりし

しりしとてしりし

しりしとてしりし

しりしとてしりし







しるしをたてしむるにまじりて  
ゆ周の成王の時、せいおう 絳裳氏けいじやうしを  
しるしをたてしむるにまじりて  
さく昔国の黄考かうかうの  
くしく制風注雨せいふうしゆうをく  
あつらひるも三とせよなるめ  
く中国の聖人せいじんも  
まじりてはるる人もや故三の釋しやくと  
うらむる至いたとまじりてはるるも  
晋の武帝しんのぶてい

感寧元年かんねいげんねん、松滋しょうじの  
休祥きゆうしやうなり天下は  
とめて白雉はくじを周しゆに  
さきめくさるる日朝庭あその  
ひひりきつひらひの  
左右の大臣さゆうのたいしんは  
と宮門みやかどの外のうへに  
人ひとふりてきき  
てさきくゆく左右の大臣さゆうのたいしんを  
興きよ 執しやく



百女ひやくにょをしむひ百濟君ひやくせい豊鐘ほうしゆをのいろと塞さい  
城じやう忠勝ちゆうせう言こと廉れんののりもくをし毛治もうぢを  
きの者ものののあををひきあて中庚ちゆうかうより  
三国さんごく公こう麻呂まろ猪名いのな公こう言こと身み三さん帰き  
君きみ魔ま穂ほ紀き臣しん平へい麻呂まろ波なみ太たい四し人にんののりく  
維いをしりてみかあまのまよをし  
時ときはひさうみきうの大だい臣しんいさうてい  
伊勢いせ王おう三国さんごく公こう麻呂まろ倉くら  
臣しん小原こはらのの後ごとてて南なん座ざののまよ

天皇てんかうをしり皇太子かうたいていとし  
ててみきいもをしひき  
ののみこもてておみおみてて巨勢こせ  
大臣だいじんをしりててみきいもをしひき  
ののりくをしりててみきいもをしひき  
清平せいへいをしりてて天下てんかをしりてて臣しん故こ  
白はく維い西せい方ほうより出いててみきいもをしひき  
をしりててみきいもをしひき  
十じゅう秋あき万まん歳さい







たゞしこころぬるを明聖あきせいのききみ  
の祥瑞さうぎをえさすもそのむすあ  
らわく朕みづかみにこれいかなるありて  
まじりて人けしこれ専せんに  
まじりて女め君きみに伴造ばんぞうをまじりて  
法はふにホおのこまよのこをけと法はふ  
して法はふをまじりて丹制度せいでよ  
しこころ所ところなりよのこをけと  
まじりて百官ホよと脚

まてあまのこころぬるを明聖あきせいのききみ  
の祥瑞さうぎをえさすもそのむすあ  
らわく朕みづかみにこれいかなるありて  
まじりて女め君きみに伴造ばんぞうをまじりて  
法はふにホおのこまよのこをけと法はふ  
して法はふをまじりて丹制度せいでよ  
しこころ所ところなりよのこをけと  
まじりて百官ホよと脚



うしちのあのと白雉といふ  
て鷹と穴戸のさしよもろつと  
いしちのあのとさみさら次下令史よ  
この大史  
いしちのあのとさみさら草壁のひ  
いしちのあのとさみさら山とさ何き并  
いしちのあのとさみさらとあめく美あ  
いしちのあのとさみさらをゆ  
いしち

交四月あしきよりたむひをま  
てしちのあんとさみさら

あしきよりいしちのあんと天皇高  
く新羅三國毎年つしを

いしちのあんとさみさら

冬十月宮地よ入んといふあしき  
いしちのあんとさみさら人よろつと  
者よい物をもいしちのあんとさみ  
あしきより持化大通荒田井並比羅



夫とよしして言のたのこしあを  
ふの文月とてあて丈六のぬいの  
のみく 俠侍八部亦四十六像をほく<sup>徳</sup>  
ふりあやの山口のあしひ大口み  
とのさきとせしすうて 千佛の<sup>せんぶつ</sup>  
みことえうやまといやの並あし  
白髪初つむし<sup>あぢ</sup> 神うまの若士あ<sup>略</sup>  
うをあはのあしきし<sup>明</sup> 編<sup>編</sup>編<sup>編</sup>二復はくし<sup>編</sup>あは  
て百

二年春三月きわくしよの朝の  
いつし、此日大六のぬいのえし  
はりれくさるの日皇祖母高十師亦<sup>とくしう</sup>  
法<sup>ま</sup>役<sup>やく</sup>祓<sup>はら</sup>一<sup>つ</sup>終<sup>つひ</sup>  
六月くさうとくはほひをきして  
みつた物あやあし  
冬二月ほりり 味<sup>あじ</sup>泡<sup>う</sup>あま二千言  
腑のあし<sup>ふ</sup>あま<sup>あ</sup>法<sup>ほ</sup>ま<sup>ま</sup>て一<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>  
なま<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup> 是<sup>こゝ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>二千七百<sup>にせんしちひゃく</sup>能<sup>の</sup>の<sup>の</sup>入<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>  
<sup>能</sup>







まゝ正月よりこの月まで班

田をくまおと人ぬおとそ田の長ハ三十

方と段とを十段と町とを 段ハ十 粗

相 稲  
十 束

三月はらのしむの朔ひのくもりの日

車駕とろくろよかつろ

又四月はらのけの朔ろのくもりの

日ほくし 惠徳とおほくちよ 請て

世量壽位ととくしむ沙門惠資と

りて論議者とけしほくし一牛と

りて聴流とやまきしむひのとのひつ

しの日講とやひこの日より用しめ

て志きうよ雨水う九日よいす。宅

屋とやう。田苗とそこなふ人とまひ

らしむのにおほん死をる。とおほし

ふの月戸籍とほくろる。とそま。五

戸と里とを里とよ長一人とま

戸の主よみれりの長をりていふ



なまことちをそくたみかれ丑亥あひまのり  
入と長とてりてあひ入とみ  
よ新羅百濟より信を運つて  
うらき物とてしり  
秋九月宮法くもきてよをちんぬら  
のおほいものさちこくくまよ  
宮敏

冬十一月みれ天下のほりしありを  
内裏よ請ておふみし大捨みあ  
僧 尼  
設計

り

四年交丑月、のとのの朔、のえ  
いぬの日、りりよつてしる大使  
小山上吉士長丹そく信し、小上吉士  
駒こけしの石原いしののり、向いほり僧、乃巖いざな  
道光みちみつけい、花勝はなかつ又また、惠照ゑしょう  
僧恩そうおんち、う道昭みちあきち、定惠じやうゑ、内大  
知能ちのう安達やすた、中臣なかつうぢの道観みちくわん、あつ、のち、春日  
あ、ん、達たつ、渠みち、毎造まいぞうの、道観みちくわん、あつ、のち、春日  
子の、の、か、り、ひ、巨勢こせ、呂菜りさい、の、と、ん、の、子



氷連老人

真玉の心

ある本よ学向僧知辨義徳のなる

らひひ坂合部連磐積とて増

り

百二十人ともひと母のり室原の

と御田とてちちつとひと

大崎ひ大山下言田のとと根

昌小掬脰とひつと小乙上掃守のひ

小麻呂の学向ひほりし道福義

向ま并一百二十人とも一船よのり土師

のむしハキとてちちつとひと

この月天皇是法師のむらよいてま

てよやひととひつとひよと

恩命おんのみこととみとのりし

ある本よいそく五年七月僧是法

沙あつやいしの阿曇寺あつみのよせらうと

は天皇いてまのとひのふまつて

その本をとてのいまのり



法師今日一紙を朕も奉りて

明日一紙を

六月百海新羅のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

る法師のあてに法師の心をまわして下

女流法師のほけしつゝあは 登二 狗

豎部子麻呂 齋奥戸直木よみとおは

せて多し佛菩薩のみるを法師

て川原寺におほすまじしむ 或本山田寺

秋七月りりしよこれ使人使人

田根麻呂ホカノ曲竹崎の門合

し一板をうりて竹嶋にうりてせ

人よりきくを五人の中よ門部金行を

人よりきくを五人の中よ門部金行を







あつたにさきひとららん

丑年春正月 侍らのくさりの翔の夜

福きみやさの都よむきてさうら

らりのねの日 紫冠をりて中臣鎌足

連よさうきて封着千戸とまらぬ

二月大唐よまきし 押使大錦上る向史

玄理

あつたよいさく 亥丑月りらうに

まきし 押使大兼下さうむこのさう

シ

大使小錦下 かのさ人麻呂 副使大

山下 兼師 惠日 判官大乙上 之の

あつた麻呂 かのさ と 阿弥陀

或木よいさく 判官小山下 書並磨

せういさく 南君直と いさくのひり

大伯せうさうき 中臣の間人のむ

老田 史鳥小 ぬさみのさう

さうらのさうき 救月よいて







夜四月吐火羅国の使者二人女二人舎  
津えの女一人風かぜありあひてひひりりり  
なりりり来る

秋七月きぬいぬの朔しつげつひのとのとの  
日西海きつうかい使し吉士きし長丹ちやうたんホホくくくくくくの  
ままささせせららほほひひととよよほほくくししよよととカ  
ままりりのの月づきりりららららつつひひホホももらら  
ここししのの天子てんしよよままままししひひてて多おほいよよ文書ぶんしよ  
宝物たからものくくすすもも申まをすししををけけめめてて小山こやま上のへととス

ほほひひ吉士きしののちちううよよしし小こ養やう下げとといいくく  
ををてて封ほう二に百ひやく戸ことといいふふ姓せいとといいふふ  
ひひてて吳ご氏しととななりり給たまはりり小こ下げとといいふふ  
吉士きし駒こまよよ小こ山やま上のへとといいふふきき給たまはりり  
冬十月ふゆじゅうがつににたたののとといいふふううがが朔しつげつ皇こう太子たいし天皇てんかう  
ののちちややままりりののとといいふふきき給たまはりりてて  
それそれををらら皇こう祖母そぼ尊そん間ま人にん皇后こうごうとといいふふ  
ててももつつりり并なら皇こう才さい公こうとといいふふとといいふふひひてて  
難波なんばのの宮みやよよとといいふふおおとといいふふ給たまはりり川がはのの祓はら











